プーチン体制を知るための5冊

【評者】
法政大学教授
油本真理

①プーチンの世界
――「皇帝」になった工作員
フィオナ・ヒル、クリフォード・G・ガディ・著
新潮社、2016年

②現代ロシアの軍事戦略
小泉悠・著
ちくま新書、2021年

③ナワリヌイ
――プーチンがもっとも恐れる男の真実
ヤン・マッティ・ドルバウム、モルヴァン・ラルーエ、ベン・ノーブル・著
NHK出版、2021年

④プーチンの国
――ある地方都市に暮らす人々の記録
アン・ギャレルズ・著
原書房、2017年

⑤ファシズムとロシア
マルレーヌ・ラリュエル・著
東京堂出版、2022年

二〇二二年二月のロシアによるウクライナへの全面的な侵攻は大きな衝撃をもって受け止められた。ロシアのウラジーミル・プーチン大統領は既に二〇年以上にわたって同国の指導的地位に居続けている。ロシアが今回このような行動に出たのはいったいなぜなのか。プーチンの下で形作られた体制はどのように作動し、そこにいかなる特徴を見出せるのだろうか。

プーチン体制を理解するためには、まずプーチンという人間を理解する必要がある。①は、彼の過去の経験などに基づいて六つのペルソナ――国家主義者、歴史家、サバイバリスト、アウトサイダー、自由経済主義者、ケース・オフィサー（工作員）――を抽出し、その枠組みを用いながら、二〇一四年までのプーチンの行動を分析している。同書の考察は、現在のプーチンが一四年ウクライナ危機時と比べてどう

変化した（あるいはしなかった）のかを考えるための良い手がかりになるだろう。

プーチン体制に軍事面から切り込んでいるのが②である。同書は、「ハイブリッド戦争」論に触れつつ、しかし古典的な軍事力が依然として重要性を失っていないことを強調した上で、ロシアの軍事戦略を明快に論じている。プーチン体制理解の観点から興味深いのは、ロシアは西側との「永続戦争」の戦時下にあるという認識を持っているとの指摘である。ロシアの一見すると不可解な行動は、軍事・外交のみならず内政でも観察されるが、その背後にこのような発想があると考えると腑に落ちる。

続いて、反プーチン陣営に目を向けたい。近年のロシアの内政で大きな注目を集めているのが、二〇二〇年八月に毒殺未遂事件に遭い、翌年一月ドイツでの療養を経て帰国した直後に拘束されたアレクセイ・ナワリヌイである。彼は現在も収監中であるが、ＳＮＳを通じて反戦デモの実施を呼び掛けるなど政権との対決姿勢を強めている。③は、ナワリヌイの三つの顔――反汚職活動家、政治家、抗議活動の指導者――を、手堅く、また余すところなく論じた書である。同書はプーチン体制の抑圧的な性質を浮き彫りにすると同時に、ロシアの未来を展望するための材料を提供している。

プーチン体制を理解する上で無視できないのが、一般の人々のプーチンに対する態度である。特に、地方の状況は非常に重要な意味を持つ。④は、ウラル地方のチェリャビンスクを長年にわたって定点観測した米国のジャーナリストが、一五年までの同地での人々の生活ぶりや社会問題を活写した作品である。本書には人々がプーチンをどう受け止めているのかを示唆するエピソードも多く含まれており、プーチン体制の足元を理解するためのヒントが得られる。

それでは、われわれはプーチン体制の全体像をどのように特徴づければよいのか。⑤はロシアにおける反ファシズムと歴史叙述、草の根のファシズム、欧州の極右との関係など、多方面にわたる興味深い議論を展開しているが、あえて単純化するならば、ロシアをファシズム国家とする言説に対する批判の書と捉えることができる。現在進行中の事態を踏まえると本書のロシア評価はやや楽観的な印象を受けるものの、ファシズムのレッテル貼りは学問的な精査に耐えられないという指摘は重要性を失っていない。この点は、これから一段と活性化するであろうプーチン論に接する際にも念頭に置いておく必要があるだろう。●

韓国の外交戦略を知る5冊

【評者】
常葉大学准教授
崔慶原

韓国では三月九日の第二〇代大統領選挙で保守野党の尹錫悦氏が勝利し、五月に新政権が発足する。新政権は、米中戦略競争とロシアによるウクライナ侵攻で米ロ対立が深刻化した世界に直面する。国際政治の「新冷戦化」が北朝鮮の対外戦略に与える影響も不透明である。新政権の対外政策は、大きく変動していく国際秩序の影響を強く受けながら、南北対話や米朝協議の再開、日韓関係の改善に取り組んでいかざるを得ない。

①は、国際秩序の制約を受けながらも自律性を高めてきた韓国外交を歴史的に分析し、米中対立下において採用可能な戦略的選択肢をさまざまな角度から検討している。著者は、中国が米国に代替するほどの力を持つようになるならば、韓国は米国と距離を取りつつも、米韓同盟で中国の影響力拡大を阻止する戦略を採用するだろうとみる。

①*South Korea at the Crossroads: Autonomy and Alliance in an Era of Rival Powers*
Scott A. Snyder・著
Columbia University Press、2018 年

②**日韓関係史**
木宮正史・著
岩波新書、2021 年

③**朝鮮分断の起源**
――独立と統一の相克
小此木政夫・著
慶應義塾大学出版会、2018 年

④**朝鮮半島冷戦と国際政治力学**
――対立からデタントへの道のり
金伯柱・著
明石書店、2015 年

⑤**文在寅政権期の韓国社会・政治と日韓関係**
小針進・著
柘植書房新社、2021 年

米中対立に巻き込まれることを避けるべく「均衡外交」を掲げてきた韓国外交の今後を見通す上で大いに役立つ。

国際秩序の変動の中で日韓関係を分析したのが②である。日韓関係にも「非対称から対称へ」という構造変容が起きているが、相手に対する思考や行動様式は依然として古い状態にとどまっていると指摘し、両国が共通利益に目を向けるように促す。両国間で構造変容が起きたのだから、単純に過去へ回帰することはできない。新しい時代に見合った関係構築を試みる必要があるだろう。

③は、朝鮮半島分断の本質を「独立を達成しようとすれば統一が不可能になり、統一を実現しようとすれば戦争が不可避になるという不都合な状態」であると突き止める。「独立と統一との相克」は朝鮮戦争を胚胎していたが、当時の分裂した南北朝鮮の指導者たちは、それに上手く対応できなかった。本書は国際秩序の変動と朝鮮半島内の分裂したナショナリズムとの関係から、分断の現状を見つめる機会を提供する。

朝鮮半島分断に内在する「相克」がもたらす負のスパイラルから抜け出すためには、何が求められるのか。④は、それを現状維持を目的とした制度化に求める。現状を制度的に承認することを、統一に至る一過程にしか見なさない傾向に一線を画し、一九七〇年代と一九九〇年代、二〇〇〇年代における韓国・北朝鮮を含む米中日ロの取り組みを分析する。著者は、現状維持の制度化の失敗は、各国がそれに「合意しなかった」からだと結論づける。その上で、各国の認識が一致する日をただ待つのではなく、自ら機会をつくり出す選択の必要性を主張する。

その「選択」は、一八年の南北首脳による政策融合から米朝首脳会談に至る過程において行われた。南北共存の基盤づくりを重視する政策志向は、今後も変わらないだろう。現在進行形の課題を考える上で、本書の視座は示唆に富んでいる。

⑤は、文在寅政権の政治外交を時系列的にたどりながら、南北関係や日韓関係に与えた影響を分析している。豊富な資料をもとに文在寅政権の対外政策を再考し、新政権が取り組むべき外交課題を考える手助けとなる。ハノイ米朝会談の失敗は、仲介者の役割を担った文在寅外交の失敗でもあったと言わざるを得ない。また、日韓の歴史摩擦が貿易から安保領域へ拡大したことには、政策的誤算が作用したことも留意すべきである。

新政権が文在寅政権との政策的連続性と差別化をどう図り、どのような対外政策を形成するか、注目される。●